

文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業  
「芸術文化による社会包摂型度の評価手法・  
ガイドラインの構築とアート実践による検証研究」に関する業務  
報告書

ケーススタディ：  
ロジックモデル構築と今後に向けての現状把握  
「音でさわる、目で踊る」  
～高齢者施設えいめいにおける音と身体のワークショップは、  
介護の現場に何をもたらすのか～

2018年3月

ケイスリー株式会社

## 目次

1. 背景と目的.....	2
2. 調査概要.....	3
2.1. 調査対象～高齢者施設えいめいで実施された「音の玉手箱」～.....	3
2.2. 実施体制.....	3
2.3. スケジュール.....	5
2.4. 進め方.....	5
3. 調査結果.....	6
3.1. 第1回研究会：カードを用いたロジックモデル作成.....	7
3.2. 第2回研究会：ヒアリング.....	13
3.3. 第3回研究会：公開研究会とロジックモデル整理.....	17
4. 提言.....	23

## 1. 背景と目的

近年、様々なアーティストが高齢者施設などに赴き、表現活動を行うことが増えてきた。いわゆる社会包摂活動などと言われる、アウトリーチ型の活動である。一方で、そこで生み出される価値が、福祉と表現の現場で十分に共有されているとは言い難い状況である。今回、文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業（平成 29 年度）研究課題：文化芸術による社会包摂の在り方の一環として、群馬大学は文化芸術による社会包摂の評価手法・ガイドライン構築の事例研究を実施した。共同研究の課題は以下の通りに定められている。

### ・ 課題概要

文化芸術基本法の基本理念（第二条）に基づき、「国民がその年齢、障害の有無，経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく，文化芸術を鑑賞し，これに参加し，又はこれを創造することができるような環境の整備」に向けた研究を行う。

本課題を踏まえて、本事業では一つの事例に焦点を当て、どのような実践を行い、どのように社会課題にアプローチしているのかを明らかにすることを目的としている。具体的にはアーツ前橋が実施した「表現の森 協働としてのアート<sup>1</sup>」（2016 年 7 月 22 日～9 月 25 日、以下「表現の森」と表記）に参加し、現在も継続している「石坂玄士（神楽太鼓奏者）・山賀ざくろ（ダンサー）×デイサービスセンターえいめい（以下、「えいめい」と表記）」の企画（ワークショップ）及びその継続である特別養護老人ホームでの「えいめい 音の玉手箱」事業（以下、「音の玉手箱」と表記）を事例に、そこで生まれた社会的価値を抽出するためのプレリサーチを実施した。

福祉分野と文化芸術が協働するためには様々な課題がある。異なる言語を用いる複数の分野間で社会的価値を共有するにはどうしたら良いのだろうか。このためにまず、事業の目的を共有することに注力した。事業の目的を共有することに先立ち、福祉分野の専門家も、文化芸術の専門家も、評価の専門家も混在した研究会を発足することとした。一見、福祉と文化芸術は社会課題へのアプローチ方法は異なるが、どちらもより良い生活を目指している。双方が目指す共生社会の実現には、お互いの差異を理解し、異なる見方や手法があることを理解することから始めるのが肝要である。本事業では特に、社会的インパクト評価<sup>2</sup>の方法論を用い、評価を通じたコミュニケーションで相互理解を深め、共通の価値を生み出すことができることを理解するきっかけとなることを目指した。社会包摂活動が

---

<sup>1</sup>「表現の森」は全 5 企画から構成され、アートと前橋市内の施設が協働し継続的に実施していくことが想定されている。アートが福祉や教育、医療の現場に入ることによってどのような科学変化が起きるかを明らかにし、表現を通して、異なる考えの人々をつなげ、理解し、共存しあえる社会を目指している。

<sup>2</sup>社会的インパクト評価では、事業に直接伴って生み出される来場者数、実施回数など、単純に数値化を「アウトプット」ばかりではなく、「アウトプット」の効果として、事業に関わる人や地域社会に起きる気持ち、中長期的に起きる行動、状態などの変化である「アウトカム」も明らかにするものである。

現場にもたらす変化を説明するために、ロジックモデル<sup>3</sup>といわれる概略図を丁寧に検討した。本報告書ではその検討プロセスや、多様な関係者に対してのヒアリングを通して明らかになったことを示すこととする。対象となるワークショップ「音の玉手箱」の価値を明らかにするために、「ロジックモデル作成」という仮説作成や、「ヒアリング」や「公開研究会」を行った。仮説作成からその検証及び、報告と振り返りの場を作ることで、事業の実践や検証をスムーズに行うために、関係性構築をすることで、ワークショップの今後の実践の一助となることも目指した。今後、より多くの福祉分野にアートの活動が導入され、また、アート関係者には福祉現場でよりよい活動ができるような協働のあり方と価値を抽出すべく、この研究会は発足した。

## 2. 調査概要

### 2.1. 調査対象～高齢者施設えいめいで実施された「音の玉手箱」～

「音の玉手箱」は、「表現の森」参加企画としてスタートした、アーティストの石坂亥士氏（神楽太鼓奏者）と山賀ざくろ氏（ダンサー）による音や身体表現の即興ワークショップ企画である。展覧会前準備期間の2016年4月から7月の間はえいめいのデイサービスにくる高齢者向けに「RHYTHM 打！ えいめい」というプログラム名で、月2回のワークショップを実施した。

その後、2017年4月からもワークショップは継続され、特別養護老人ホームえいめいの入居者向けのワークショップ「音の玉手箱」へと変化していった。現在は主に寝たきりに近く、認知症状の強い高齢者を対象に音とダンスのワークショップを3ヶ月に2回程度実施している。

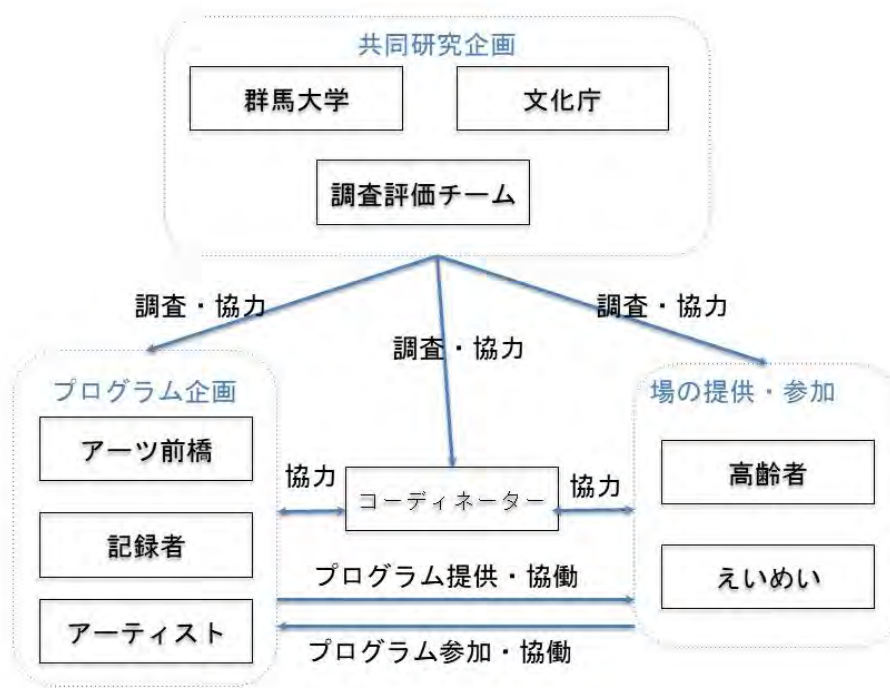
### 2.2. 実施体制

本事業は、群馬大学と文化庁が共同研究として主催し、そのケーススタディには対象となるワークショップを企画運営するアーツ前橋スタッフ、アーティスト、記録者、コーディネーター、プログラムの受け手となる福祉施設職員が協力している。そして、このワークショップの価値を抽出するために、調査評価の専門家（評価調査チーム）が参加し、企画の社会的インパクトの言語化を共に実施した。

---

<sup>3</sup> ロジックモデルとは数値化できるアウトプット、気持ちや行動や状態の変化を言語化したアウトカムを因果関係がわかるように示した概念図である。

図表 1 調査評価事業実施体制



また、研究会参加者は以下のとおり。

図表 2 研究会参加者

氏名	所属
茂木一司	群馬大学教育学部
春原史寛	
手塚千尋	東京福祉大学短期大学部
今井朋	アーツ前橋
小田久美子	
木村祐子	前橋市地域包括センター永明
熊谷薫	国際芸術祭及び地域アートプロジェクトの事業評価検証会運営事務局
石幡愛	
高橋かおり	
落合千華	ケイスリー株式会社
幸地正樹	

※研究会企画運営及び報告書執筆・編集：熊谷薫、石幡愛、高橋かおり、落合千華

## 2.3. スケジュール

本事業は 2018 年 2～3 月にかけて実施し、3 回の研究会（ヒアリング・報告会含む）を実施し、問題の確認、調査実施、報告を行った。

## 2.4. 進め方

本事業では 3 回の研究会を通して、「音の玉手箱」の社会的インパクトを探るための事業評価を実施するために、その仮説となる成果の言語化をしロジックモデルの作成をおこなった。

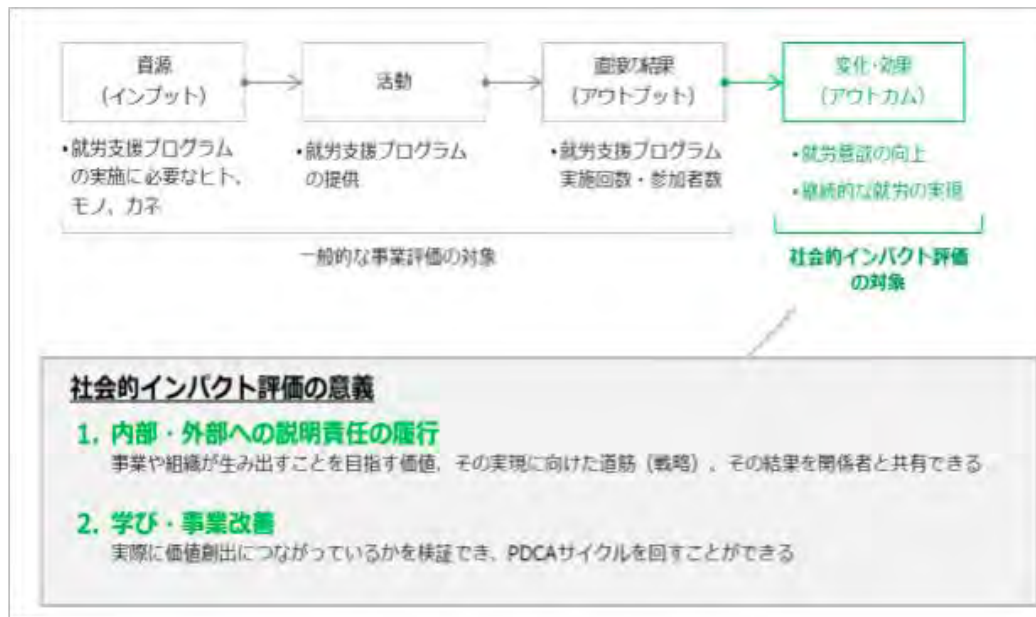
具体的な内容は以下のとおりである。第 1 回～第 3 回の研究会を実施し、下記のような内容で成果の言語化を行うことを目指した（図表 3）。

図表 3 研究会の内容と目的

研究会	内容	目的	参加者
第 1 回研究会	企画提供側とのロジックモデル作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡易のロジックモデルを作成し、企画の全体像を把握する</li> <li>・関係者の関係性構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アーツ前橋</li> <li>・コーディネーター</li> </ul>
第 2 回研究会	関係者へのヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係者に深く話を聞き、成果の言語化を深める</li> <li>・第 1 回研究会より広い関係者の関係性構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設長</li> <li>・施設職員</li> <li>・アーティスト</li> <li>・記録者</li> <li>・アーツ前橋</li> </ul>
第 3 回研究会	企画ならびに調査の紹介 意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての関係者が一堂に会することで企画の目的を改めて共有する、議論する</li> <li>・全員でロジックモデルの内容を共有する</li> <li>・関係者の関係性構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設長</li> <li>・施設職員</li> <li>・アーティスト</li> <li>・記録者</li> <li>・アーツ前橋</li> <li>・一般参加者</li> </ul>

本事業で用いた社会的インパクト評価では、事業に直接伴って生み出される来場者数、実施回数など、単純に数値化を「アウトプット」ばかりではなく、「アウトプット」の効果として、企画に関わる人や地域社会に起きる気持ち、行動、状態などの変化である「アウトカム」も明らかにしていく評価手法である。「アウトカム」とは、企画に関わる人や地域社会に起きる気持ち、行動、状態などの「成果」を捉えたもので、初期・中間・最終など何段階かに分けて考えることができる。

図表4 社会的インパクト評価の流れと意義



なお、文化芸術活動の達成できるアウトカムには主に内在的、教育的、経済的、社会的アウトカムがあると言われ<sup>4</sup>、それぞれ下記のように説明できる。

- ・内在的アウトカム：個人の経験や、そこで生まれた文化芸術活動と鑑賞者の個人的なつながりから生まれる変化
- ・教育的アウトカム：知識、スキル、能力の変化を伴う等
- ・経済的アウトカム：アート活動に対する消費、アート領域の雇用、地域経済の発展を引き起こすもの等。
- ・社会的アウトカム：コミュニティの変化、個人や家族のウェルビーイングの変化を生み出す等

今回はこの中でも特に社会的アウトカムが重要であり、内在的アウトカム、教育的アウトカムがどのように社会的アウトカムに結実するかを明らかにするロジックモデルの仮説を構築することを目指した。

### 3. 調査結果

第1回研究会では既を用意されているアウトカム項目を用いることで、成果の言語化をより簡易にし、全体像をまず捉えることを試みた。さらに第2回研究会では、現場をより深く知り、整理するために、第1回研究会よりも対象者を広げて、「音の玉手箱」に関わ

<sup>4</sup> Angela Kail, Lynn Simmonds and Sally Agwell. (2015). The Art of philanthropy; Making the most of your giving to the arts.

る様々な立場の企画の関係者にヒアリングをした。さらに現場の観察を予定したが、今回は施設側の事情で叶わなかった。最後に第 3 回研究会では本事業の内容を一般公開するとともに、関係者が一堂に会して事業の目的や作成したロジックモデルを共有することで、次年度以降のワークショップ実施をより良く実践するための企画の整理と関係性構築を目指した。

### 3.1. 第 1 回研究会：カードを用いたロジックモデル作成

実施日時：2018 年 2 月 5 日 17 時～20 時 30 分 ロジックモデルカードによるワークショップ

参加者（敬称略）：群馬大学（茂木一司、春原史寛）、東京福祉大学（手塚千尋）、アーツ前橋スタッフ（今井朋、小田久美子）、コーディネーター：前橋市地域包括センター永明（木村祐子）、リサーチャー（熊谷薫、石幡愛、高橋かおり、落合千華）、文化庁担当者（内村太一、渡辺英人）

会場：アーツ前橋

内容：ステークホルダー（利害関係者）の洗い出し・運営者の想定するロジックモデルの検討

第 1 回研究会においてはこの調査の目的と方法を「音の玉手箱」の主催者らと共有する場を設けた。ここでは、ヒアリング対象者を選定するためにステークホルダー分析を行い、ヒアリング項目を精査するためにカードを用いたロジックモデル作成ワークショップを行なった。

まず表現の森、ならびにえいめいでのワークショップ「音の玉手箱」で実施をしてきたことについて、研究会メンバー全員が説明を受けた。具体的にはアーツ前橋キュレーターの今井氏から、「表現の森」の概要について話があり、2016 年に展示を行っており、継続企画として数年後には再び展示を考えているということであった。「音の玉手箱」は 5 つある企画のうちの 1 つである。続いてこのプロジェクトのコーディネーターで、えいめいにも勤務する木村氏から、今回のワークショップの実施場所であるえいめいについて、そして施設で行われているワークショップについての説明があった。

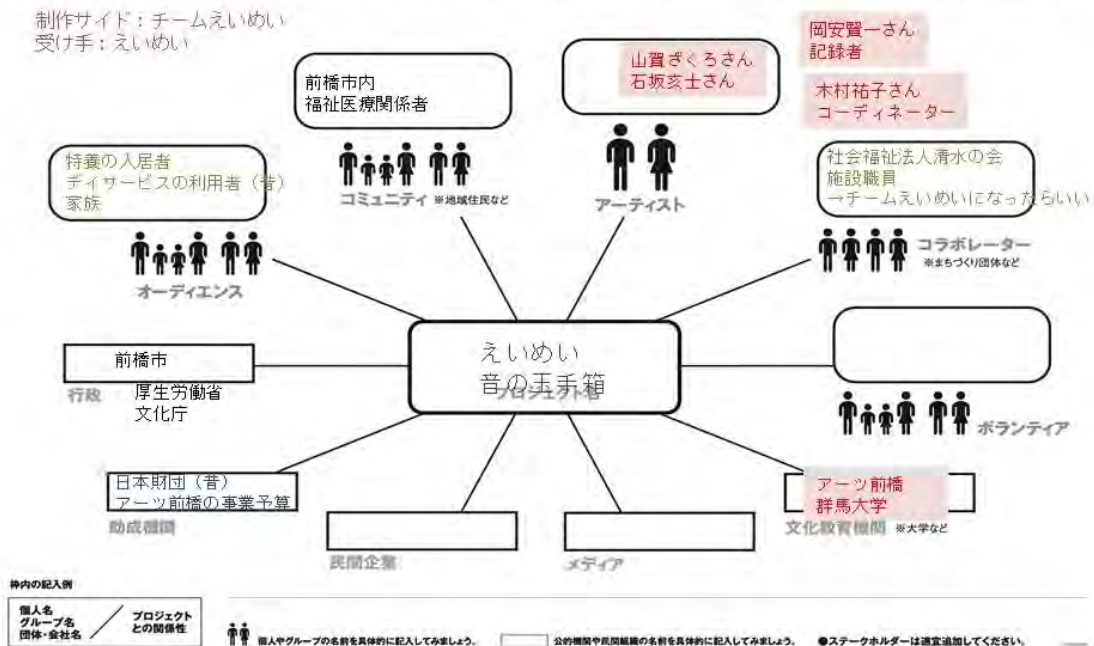
そして議論を整理する中で、「音の玉手箱」に関わる人たちや団体、組織などのステークホルダーの書き出しを行った（図表 5）。



図表 5 「音の玉手箱」ステークホルダー図

## ステークホルダー（利害関係者）を意識する

[STEP 1] ワークシート | 自分たちの組織をプロジェクトの中心に据えて、ステークホルダー（関係者や団体）との関係図を作ってみましょう。



出典：Art Archive Kit ©NPO法人Art & Society

図表 5 のステークホルダーごとの整理を踏まえて、あらかじめ評価調査チームが用意したカードを用い、簡易的にロジックモデルの作成を行った。

調査評価チームの熊谷・石幡・高橋が 2017 年度に実施した SaMAL（相模湾・三浦半島アートプロジェクト）の調査評価事業において、試作版として作成した地域型アートプロジェクトにおけるロジックモデルのキーワードカードを用いた。これは、SaMALに参加する各地のアートプロジェクトへのインタビューやアンケートから抽出した言葉について、キーワードとして取り上げ、1 枚につき 1 つのカードとしてまとめたものである。さらに「表現の森」が社会包摂事業であることから、2016 年度に日本劇団協議会で実施した「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」に基づく報告書<sup>5</sup>（熊谷・高橋・幸地が執筆参加）における 5 つの事例から、ロジックモデルのキーワードを抽出しカードを作成した。具体的なキーワードは図表 6 のとおりである。表中の「どうする？」のところで、具体的な動詞を選択し、どのような行動に結びついたのか、あるいは結び付けたいのかを表す。

<sup>5</sup>全文は以下の URL より閲覧可能である。

<http://www.gekidankyo.or.jp/book/web%E7%89%88%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E5%8C%85%E6%91%82%E6%B4%BB%E5%8B%95%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>

図表6 社会包摂系芸術事業に関わるキーワード

<p><b>【分類】環境</b> 居場所</p> <p>維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る</p>	<p><b>【分類】自己</b> 心の安定</p> <p>維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る</p>
---	--

図表7 ロジックモデルカードサンプル

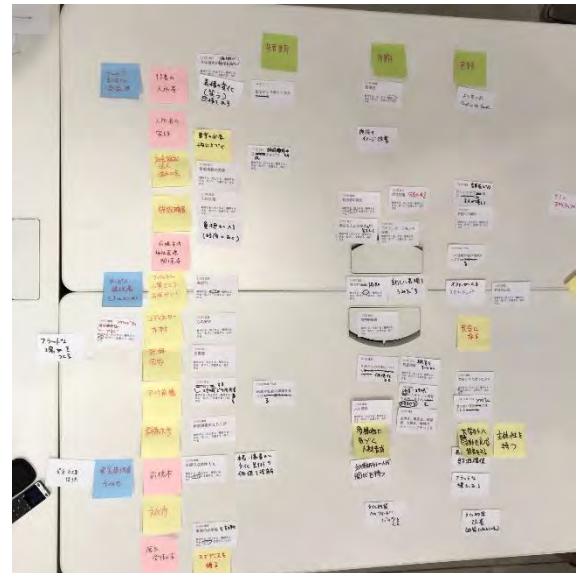
カテゴリ	何を	どうする？
環境	居場所	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	経済的安定	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	芸術と社会のつながり	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	参加者の変化	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	支援の必要性	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	事業の必要性	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	周囲からの援助	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	場の重要性	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	新規事業の立ち上げ	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
環境	人材育成	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	安心感	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	芸術への興味	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	自己決定する力	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	自己肯定感	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	自己発見	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	自立	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	社会的承認	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	社会問題への意識	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	充実感	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	症状回復	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	信頼感	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	心の余裕	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	身体機能の回復	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	精神的成長	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	達成感	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	表現力	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
自己	余暇活動の充実	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
対人	コミュニケーションの促進	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
対人	異なる人との交流	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
対人	交友関係の広がり	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る
対人	相互理解	維持する・向上する・獲得する・作る・気づく・支援する・共に作る

この2種類のカードを用いて、ロジックモデルを作成するワークショップを行った。実際に手を動かしながら言葉を探しつつ、評価調査チームが議論をファシリテートしながら、企画についての質問を重ねることを通し、企画の価値が明らかになっていった。また、用意したカードで不足する事項や、文言が適切でない事項については適宜加筆修正を行った。

このようなプロセスを経て約2時間で暫定的なロジックモデルを完成した(図表8~10)。内容としては、美術館職員・コーディネーターが主にワークショップに参加をしたため、そうしたステークホルダーについての項目はより多く成果が抽出されたが、参加していなかったアーティストや施設職員については推測の点や不明の点が多くあった。また、話の中から、アーティストのみならず記録担当の岡安氏が重要な位置を占めていることが明らかになったため、後続のヒアリング実施における対象者に加えることとなった。

この時作成したロジックモデルは次のとおりである。グレーで示されるボックスは、ワークショップの参加者からは項目として挙がらなかった部分であり、後続のヒアリングで特に聞き取る点として認識された箇所である。

図表8 ワークショップの様子(左:実施風景・右:完成図)



図表9 ロジックモデル図 (2018.2.5.ワークショップ時作成)

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			短期	中期	長期
特養の入所者	WS参加	WS参加回数 時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体の瞬間的な反応がある</li> <li>・表情の変化がある (笑う怒るなど感情が変化)</li> <li>・生活が楽しくなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・居場所ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より良い死を迎える (Quality of Death)</li> </ul>
入所者の家族			<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業の必要性に気づく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設のイメージ改善</li> <li>・施設外との交流の広がり</li> </ul>	
社会福祉法人 清水の会			<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業の必要性に気づく</li> <li>・余暇活動の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設外との交流の広がり</li> </ul>	

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			短期	中期	長期
施設職員		実施回数 参加人数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・負担が減る</li> <li>・心の余裕ができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者の変化に気づく</li> <li>・異なる人との交流が生まれる</li> <li>・元気になる</li> <li>・コミュニケーションが促進される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忙しい中で関わる人が増える</li> <li>・事業の当事者になる</li> </ul>
前橋市内 医療福祉関係者					<ul style="list-style-type: none"> <li>・この活動が他の地域にも広がる</li> </ul>

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			短期	中期	長期
アーティスト 山賀さくろ 石坂玄士	ワークショップを行う	実施回数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現力が向上する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的認知が向上する</li> <li>・新しい表現を生み出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オファーが来る</li> <li>・スキルアップ</li> <li>・経済的安定</li> </ul>
コーディネーター 木村祐子	ワークショップを企画する、実施する	実施回数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心の安定を獲得する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神的成長を獲得する</li> <li>・職員とアーツ前橋が相互理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元気になる</li> </ul>
記録 岡安賢一	ワークショップを記録する	記録映像の編集・公開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・充実感を獲得する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの活動について価値化する</li> </ul>	

図表 10 ロジックモデル図 (2018.2.5.ワークショップ時作成)

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			短期	中期	長期
アーツ前橋	ワークショップの 企画・実施	実施回数	地域での存在を肯定する 地域や社会の課題を見つける	自分たちの活動について価値化する 施設職員とアーツ前橋が相互理解する 施設・地域の人をもっと運営や企画に巻き込む・かき混ぜる 表現者、鑑賞者、運営者、支援者、地域のネットワークづくり	芸術と社会のつながり 質の高いプログラムが生まれる
群馬大学	ワークショップの記録	ワークショップへの参加、分析	新規事業の立ち上げ	人材育成 多様性に気づく 文化芸術外の人に関心を持つ	大学外へ教育活動を広げる教育をする 主体性を持つ 長期的な財源確保 フラットな場がある
前橋市			支援の必要性に気づく 市長・議員が文化芸術の価値を理解	文化芸術以外の人に関心を持つ	財政確保 フラットな場がある
文化庁			事業の必要性に気づく、言語化するエビデンスを得る	文化政策へのフィードバックを得る	文化政策の改善 政策に落とし込む
厚生労働省					

こうして作成されたロジックモデルを評価調査チームで共有したうえで、第 2 回研究会のヒアリングに臨んだ。

### 3.2. 第2回研究会：ヒアリング

日時：2018年2月23日 15時～17時 関係者インタビュー

参加者（敬称略）：群馬大学（茂木一司）、東京福祉大学（手塚千尋）、アーツ前橋スタッフ（小田久美子）、コーディネーター：前橋市地域包括センター永明（木村祐子）、前橋市地域包括センター永明（湯澤文昭施設長、施設スタッフ1名）アーティスト（山賀ざくろ）、記録者（岡安賢一）、リサーチャー（熊谷薫、石幡愛、高橋かおり、落合千華）、文化庁担当者（内村太一、野中宏美）ヒアリング対象者：湯澤、施設スタッフ1名

会場：社会福祉法人清水の会 特別養護老人ホームえいめい

内容：関係者が感じるワークショップの価値や課題をヒアリング

第2回研究会では、初回研究会を踏まえて決定した対象者にヒアリングを行なった。ここでは、初回のワークショップで示された各アウトカムの妥当性を検証し、より適切な表現に修正すること、また、初回ワークショップでは出てこなかったアウトカムを引き出すことを目的とした。そして、ヒアリングを踏まえて、初回研究会で作成したロジックモデルを修正した。

そこで対象者を以下の3グループに分け、ヒアリングをおこなった。

グループ1：施設長、施設職員

グループ2：アーティスト、記録者

グループ3：アーツ前橋、コーディネーター

「音の玉手箱」に対して、どのような動機で取り組んでいるか、どのような成果を期待しているか、関わることによって自分自身や他のステークホルダーにどのような影響・変化があると考えているか、目的を達成するために課題となっていることは何か等についてヒアリングを実施した。各グループで、それぞれ以下のような情報が得られた。

グループ1：施設長、施設職員

施設長・施設職員の意見	
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・施設職員は、入居者が音に反応したり、昔のことを思い出したり、豊かな表情するのを見て、「音の玉手箱」が彼らにとって良い刺激になるという実感を持っている。</li><li>・無反応の人、拒否反応を示す人もおり、入居者によって反応さまざまだが、楽しみの選択肢のひとつとして、このワークショップがあるとよいと考えている。</li><li>・特養の生活は外出機会が少なく閉鎖的になりがちだが、「音の玉手箱」は入居者が施設外と接する大事な機会として認識されている。</li><li>・施設にとって、レクリエーションは内容がワンパターン化してしまう難しい課題だが、「音の玉手箱」があることでレクリエーションを充実させることができる。</li></ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別ケアの重要性を分かりながらも、対応しきれない状況がある一方で、アーティストが一人一人に向き合っている点が、通常のレクリエーション・慰問とは異なる特長として認識されている。</li> <li>・施設職員は、認知症高齢者に接する際にある種の構えを取ってしまうが、アーティストはそれとは違う接し方や雰囲気をつくりかたをしているという気づきを得ている。</li> <li>・高齢者が最期を穏やかに迎えることで、家族にも安心してもらいたいという意図があり、家族にワークショップの映像を見せる機会を設けている。良い表情が記録されていることで、家族にも喜ばれている。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップの状況にどう介入してよいのかわからず、アーティストにお任せになっているのが現状。</li> <li>・今後は、家族も含めて活動できると、施設に対する家族の理解も変わってくるのではないかと施設長は考えている。</li> </ul>

#### グループ1：アーティスト、記録者

アーティスト、記録者の意見	
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デイサービスと比べて特養の入居者は目に見える反応が少なく、アーティストを盛り上げてあげようという気遣いもないため、アーティストにとっては手強い現場だが、それゆえに面白く、毎回新しいことを試すので、飽きない現場である。</li> <li>・アーティストは相手に合わせて新しい関わり方や表現を生み出している。例えば、手を動かすづらい人にも木琴があるところまで手をのばさせてバチを振らせるのではなく木琴をできるだけ近づけていく、体が動かないなら顔で踊るなど。</li> <li>・回数を重ねるうちに入居者からの反応も良くなり、予期せぬ反応が出てきた。アーティストの慣れによる部分もあるが、入居者（認知症で顕在的な記憶はない）にも何らかの記憶が残っていて、反応していたのではないかと。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アーティストと高齢者の間で起きている関わりを職員も共有し、気づきを日常のケアに活かしていくことが大事だが、職員の多くは関わり方をつかめておらず、そこで起きていることに気づいている職員はまだ少ない。</li> <li>・職員の気づきを促すためには、職員も交えた振り返りの場を設定するなどが必要だが、木村氏だけではそこまでマネジメントしきれないため、コーディネートできる人を増やしていく必要がある。</li> </ul>

#### グループ3：アーツ前橋、コーディネーター

アーツ前橋、コーディネーターの意見	
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アーティストが高齢者一人一人と向き合うなかで、体がうまく動かないからこそ生まれてくる独特の表現を発見し、表現を返す。これは高齢者とアーティストの感性の</li> </ul>

	<p>やりとりや共鳴とも言うべきものであり、普段のケアとは異なる刺激の強さ・振れ幅がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・閉鎖的な施設にこうした活動があることで、生活の質は格段に上がるということをコーディネーターは実感している。</li> <li>・見る側の感性が培われることによって、高齢者の動きに対する期待感が蓄積されている。</li> <li>・自ら動かなかった高齢者の反応を見て感動した看護師がいるなど、ワークショップから何かを受け取っている職員も少数ながらいる。</li> <li>・以前の企画展の際には、介護高齢課の職員が見に来るなどの広がりがあった。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に高齢者にとってどれだけの効果があるのかは未知数。</li> <li>・高齢者の生活歴は豊かで面白いので、アーティストが高齢者と関わることで、何か面白いものが生まれるのではないかと。</li> <li>・施設職員にも何か響いてほしい。アーティストは正しさ（例えば、楽器の正しい扱い方など）から逸脱した自由な動きを認めて、表現に活かす。そういった寄り添い方から学ぶことはあるはずだ。</li> <li>・施設職員の多くは見守る雰囲気になってきているが、まだ主体的に関わるまでには至っていない。</li> <li>・職員を巻き込むためには、コーディネーターと特養の職員の関係性構築が必要。</li> <li>・アーツ前橋のアウトリーチ活動と美術館での企画展の連動により、美術館が様々な人と協働し、活動の認知を広げていくことで、文化的な生活や QOL の向上につながると考えられる。</li> </ul>

ヒアリング結果を踏まえてロジックモデルを修正した（図表 11～12、下線部分）



図表 11 ロジックモデル図 (2018.2.23.ヒアリング終了時作成)

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			初期	中間	最終
特養の入所者	WS参加	WS参加回数 時間	心身への刺激になる 施設外との関わりを持つ WSを楽しむ・居心地良く過ごす	文化的生活を送る 居心地よく楽しい生活を送る	より良い死を迎える (Quality of Death)
入所者の家族	記録映像を見る お便りを見る		家族 (高齢者) の喜びを共有できる	安心して家族を預けられる 施設との関係性が良くなる 施設外との交流の広がり	
社会福祉法人 清水の会	ワークショップの 実施 お便りの発行 家族会等での説明		余暇活動 (レクリエーション) を充実できる 家族とのコミュニケーションが円滑になる	施設外との交流が広がる 家族に信頼される	入所者に質の高いケアを提供可能となる 職員の長期的雇用に可能となる

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			初期	中間	最終
施設職員		実施回数 参加人数	高齢者の反応に気づく・心を動かされる ケアに関する学びを得る	より質の高いケアの方法が可能になる	より長期的にやりがいい働き方が可能となる
前橋市内 医療福祉関係者			この活動を知る・関心を持つ		この活動が他の地域・施設にも広がる

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			初期	中間	最終
アーティスト 山賀さくる 石坂玄士	ワークショップを行う	実施回数	高齢者の反応から新しい発見を得る 表現力が向上する	新しい仕事に関するオファーが来る 新しい表現を生み出す	経済的安定 作家としての成長
コーディネータ 木村祐子	ワークショップを企画する、実施する 他の職員に働きかける	実施回数	施設内での関係性をつくる・広げる	施設内の理解者を獲得する	施設内の仲間 (活動に関わる職員) が増える
記録 岡安賢一	ワークショップを記録する	記録映像の編集・公開	高齢者の変化に気づく 表現の幅が広がる	充実感や達成感を獲得する	なし

図表 12 ロジックモデル図 (2018.2.23.ヒアリング終了時作成)

利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
			初期	中間	最終
アーツ前橋	ワークショップの企画・実施 (企画展の企画・実施、ウェブでの発信)	実施回数	地域や社会の課題を見つける 美術の非専門家と協働する 事業の認知を広める	施設職員とアーツ前橋が相互理解する 施設・地域の人を巻き込む・かき混ぜる 従来の障害者アートとは別のやり方を確立する 地域における美術館の存在意義が認められる	芸術と社会のつながりができる 質の高いプログラムが生まれる
群馬大学	ワークショップの記録	ワークショップへの参加、分析	新規事業の立ち上げ	人材育成につながる 多様性に気づく 文化芸術外の人に関心を持つ	大学外へ教育活動を広げる教育をする 主体性を持つ 最終的な財源確保 フラットな場がある
利害関係者	活動 (アクティビティ)	活動結果 (アウトプット)	変化・影響 (アウトカム)		
初期	中間	最終			
前橋市			担当課が事業の意義や必要性を言語化する 市長・議員が文化芸術の価値を理解	高齢者介護の担当課職員が関心を持つ 福祉・教育をはじめ様々な部署が関心を持つ	財源確保 フラットな市民参加の場が維持される
文化庁			事業の必要性に気づく、言語化するエビデンスを得る	文化政策へのフィードバックを得る	文化政策に落とし込む 事業モデルを策定する
厚生労働省					

### 3.3. 第3回研究会：公開研究会とロジックモデル整理

第3回：2018年3月9日 16時～20時30分 シンポジウム

参加者（敬称略）：群馬大学（茂木一司、春原史寛）、東京福祉大学（手塚千尋）、アーツ前橋スタッフ（今井朋、小田久美子）、コーディネーター（木村祐子）、施設長（湯澤文昭）、施設職員、アーティスト（石坂玄士・山賀ざくろ）、記録者（岡安賢一）、リサ

ーチャー（熊谷薫、石幡愛、高橋かおり、落合千華、幸地正樹）、文化庁担当者（内村太一、渡辺英人）

および一般参加者（福祉職従事者、アーティストなど）

会場：前橋市中央公民館

内容：ロジックモデル案の報告と座談会

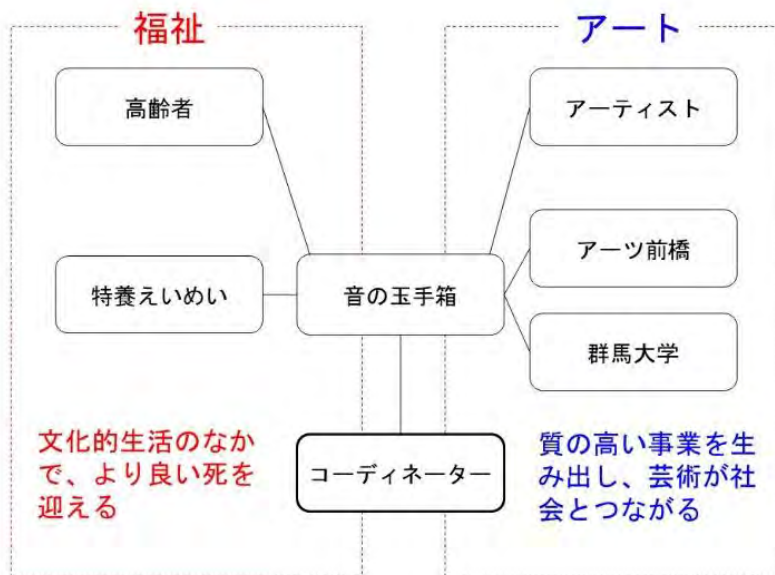
図表 13 キックオフシンポジウムのスケジュール（敬称略）

時間	内容	担当者
17:30-17:40	挨拶・趣旨説明	茂木
17:40-18:00	企画内容説明・映像上映	今井・岡安
18:00-18:20	調査報告	熊谷
18:40-19:10	座談会	湯澤・石坂・山賀・木村・熊谷・茂木
19:10-20:00	意見交換ワークショップ	全員

第3回研究会（キックオフシンポジウム）では、第2回研究会を踏まえて修正したロジックモデルをもとに、公開研究会を開催した。ここでは、「音の玉手箱」の企画説明と調査プロセスおよびロジックモデルの紹介を行った。その後、参加者も交えて、アートによる社会包摂事業やその評価に関する他事例・課題等について情報交換した。

その中でこれまでのワークショップとヒアリングを踏まえた関係図ならびにロジックモデルを提示した。まず、今回のステークホルダーには福祉系の関係者とアート系の関係者の両者があり、それらを仲介するかたちで「音の玉手箱」が実施され、その運営にはコーディネーターの存在がかかわっていることを図表14のように示した。

図表 14 「音の玉手箱」をめぐるステークホルダーの関係図

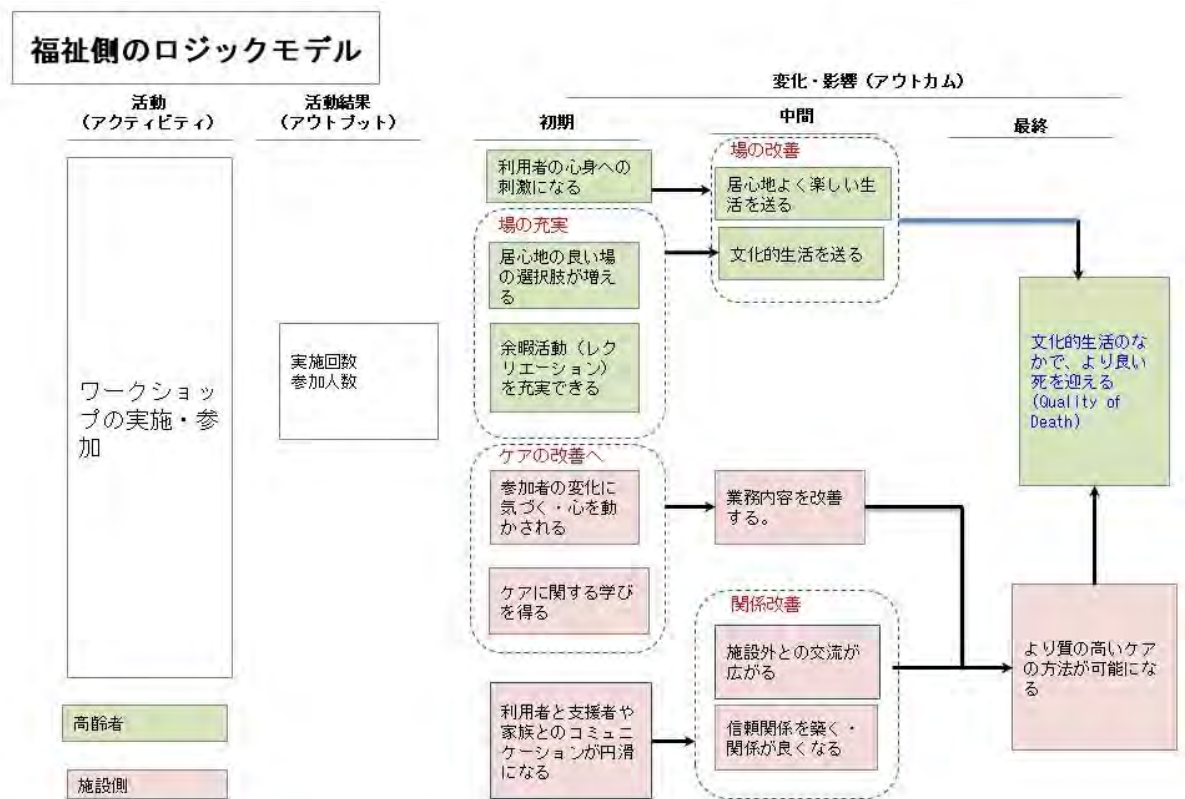


プログラムの紹介、評価・調査チームの枠組みの紹介ののち、「音の玉手箱」に関わる方々による座談会を行った。それに引き続いて後半では、一般来場者も交えて小グループにわかれ、「音の玉手箱」に関する意見交換を実施した。

評価調査チームの枠組みについては、ヒアリングを踏まえたロジックモデルの再整理を行った。上記図の福祉側、アート側それぞれのロジックモデルを示したのち、統合版について説明をした。

福祉側の最終アウトカムは「文化的な生活の中でより良い死を迎える（Quality of Death）」である。現在「音の玉手箱」が活動している特別養護老人ホーム（特養）であるが、そこで穏やかに過ごす中で少しでも文化的な要素に触れてほしいというのが、職員や施設、あるいは家族の望みである。そのために、どのようなことが出来るのかというのが特養での活動の肝になる。えいめいでの「音の玉手箱」の活動を通じた高齢者への影響ならびに施設側の対応への影響をより詳細に言語化すると、例えば高齢者への影響としては、心身への刺激となることで、レクリエーションの場が充実するのが短期アウトカムとなる。最終的には文化的な生活を過ごすことへとつながっていく。施設側としては、外部の人のワークショップの展開により、普段見ることのできない高齢者の反応を目の当たりにしたり、自分たちが実施するケアに関する気づきを得たりすることができる。これが日々の業務改善や、家族との関係向上へとつながる可能性を持っている。

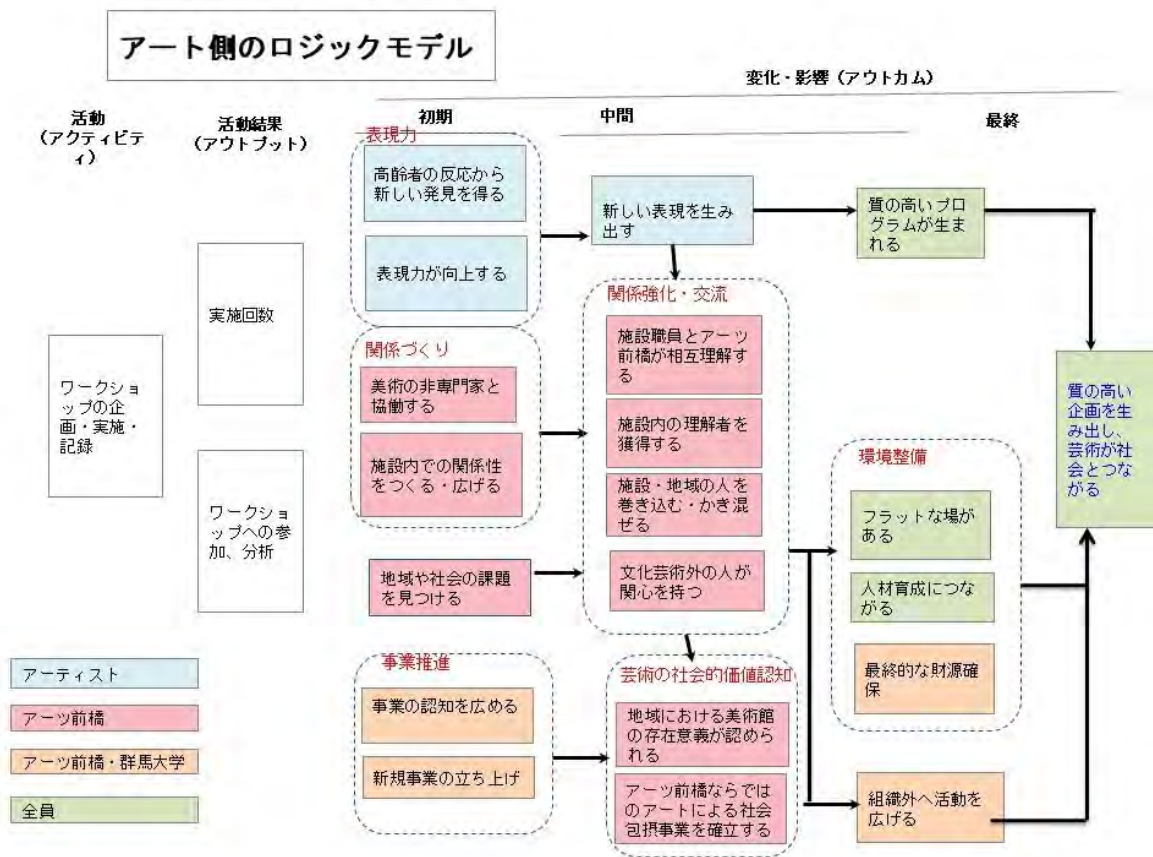
図表 15 福祉側のロジックモデル（2018.3.9.最終版）



続いて、アート側のロジックモデルを作成した。アート側の最終アウトカムは「質の高い企画を生み出し、芸術が社会とつながる」である。

アーティストは高齢者という通常とは異なるオーディエンスを前に、毎回違う表現を即興で展開している。これは表現力の挑戦の機会となっており、ここには新しい表現の萌芽がある。ワークショップを企画したアーツ前橋側は、美術を通じた協働とともに、美術館が館外での活動を広げることで地域における認知度を高め、様々な機関との関係を構築することを目指していることが明らかとなった。他方調査という観点からは、群馬大学とアーツ前橋の協働を通じて、企画の認知とともに、芸術の社会的価値の認知を測ることが目標である。

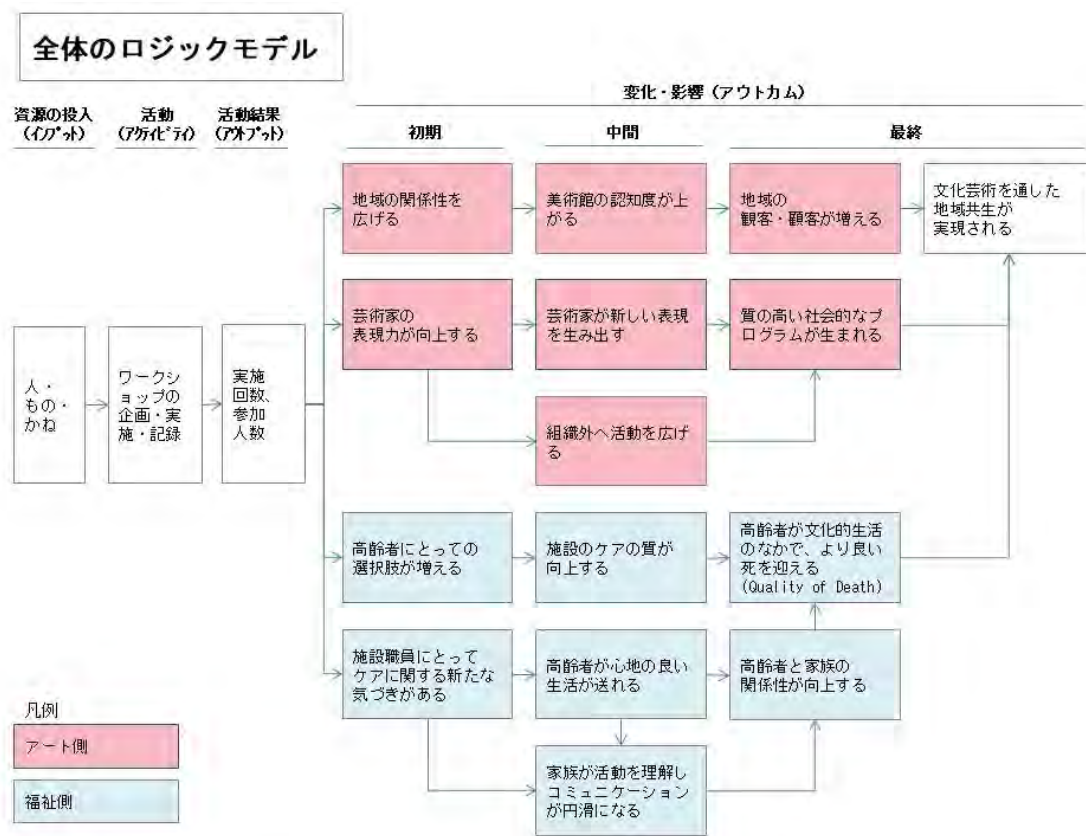
図表 16 アート側のロジックモデル (2018.3.9.最終版)





この2つを統合した全体のロジックモデルで最終アウトカムにおかれるのは、文化芸術を通じた地域共生が実現されることであると考えられる。地域における福祉活動と、地域へ広がっていく芸術活動の結節点となるのがこの最終アウトカムであろう。一方で、この全体でのロジックモデルは関係者と深く再度議論の時間がまだとれていないため、今後福祉側、アート側、リサーチ側を含めて議論を行い、本企画の目指すイメージをより深く共有することが必要である。（本来としては、福祉、アートいずれも包摂した統合版を先に作成してからそれぞれのロジックモデルが見えてくることが事業の目指す方向性に合っている。本事業ではワークショップやヒアリングの後、関係者同士で全体像を見据えた統合版のロジックモデルについて対話を行う時間が取れなかったため、評価調査チーム側で整理したロジックモデルを基に、研究会の座談会へとつなげることとした。）

図表 17 全体のロジックモデル (2018.3.9.最終版)



調査評価チームからのロジックモデルの報告ののち、現状での相互理解のために、湯澤施設長、ワークショップ実施アーティストの石坂玄士氏、山賀ざくろ氏、本企画のコーディネーターであり施設職員である木村祐子氏、本調査事業の企画者である茂木一司氏ならびに調査評価チームから熊谷が登壇し、座談会を実施した。

座談会では特養でワークショップを開催するようになった経緯についてアーティスト 2名からの説明があった。それ以前にやっていたデイサービスでのワークショップと比べる

と必ずしも反応があるわけではないが、それがむしろ子供に対してのワークショップのようでありやすい、毎日が挑戦であると述べていた。特養でのワークショップは施設の方からも「無理ではないか」と言われることもあり、確かに始めはアーティスト殺しとも思われる状況であった。しかし、お試しでやってみたところ感触がよく、結果的に続けていくことになった。毎回特養の方々が待っているという訳ではないが、確実に空気は変わり入りやすくなってきているという。

このようなアーティストの様子に対して施設長は「うまいな」という印象をもつという。特に岡安氏の撮った映像は家族からも好評であり、いつもとは違った一面を施設職員や家族に見せる良い機会になっている。

このワークショップは施設職員であり茂木氏の下で学んだ木村氏のコーディネーターが重要となっている。木村氏には施設で過ごす方々には日々の生活に変化が少なく、その中で楽しみや潤いの1つとしてこのワークショップが作用してほしいという思いがある。彼女は施設とアーティスト・アーツ前橋との仲介をする中で、アーティストの方々が気を遣わずにワークショップを行えるよう準備や段取りを整えるなどを行っていた。

その後、フロアにいたアーツ前橋の小田氏から、本企画の展開・継続において木村氏の役割は欠くことができなかつたという意見があった。また、アーティストにとってもすべて自分たちが段取りを整えるのではなく、行ってワークショップをするだけの環境になっていることはすごく楽だということを手賀氏は話していた。加えてそのほか施設の相談員の協力も大きかったと木村氏は話す。とはいえ、職員たちの間にはまだこの企画の大切さは伝わり切っていないのではということ映像記録の岡安氏からの意見であった。

木村氏が表現していたように、この企画においては、アーティスト、施設職員、美術館職員、記録撮影者のそれぞれがそれぞれのキャラクターや役割分担を果たしながらチームとして働いていることが、全体としての企画とワークショップの実施の継続に繋がっているであろう。

とはいえ、関係者が改めて話す機会はなく、今回の座談会での議論は、現在関わっている参加者同士の相互理解という面が強かった。

その後、参加者を巻き込んで4つのグループになり今回のキックオフシンポジウムを受けての感想や今後の展開が話し合われた。テーブルごとにトピックは異なり、現場への活かし方や、コーディネーター育成の必要性、他企画への応用可能性について、それぞれ話し合われた。

本キックオフシンポジウムの一般参加者は多くなかつたが、群馬県前橋市という地方としてこのような実験的な試みが行われていることを少しでも多くの人々に知らせる機会とはなつたであろう。本事業を継続することで、今後どのように中長期的なロジックモデルのアウトカムが達成されるのか、あるいはそれがどのように書き換わるのか、伴走しながら調査・記録をしていく必要があるだろう。

## 4. 提言

### ・ 本事業の成果

本年度の事業では、一つの事例研究に留まったが、ステークホルダーを明らかにし、重要な受益者を特定し、成果の言語化を関係者と丁寧に実施、ロジックモデルを作成した。また、現在は研究会のメンバーを始めとし、関係者がフラットな意見交換をして本事業を進めており、この良好な関係性構築が良い評価の在り方につながっていると考えられる（図表 1）。元々プログラム運営に関わる関係者の関係性構築はされていたが、今年度より調査評価チームが加わったことで、今までなかった関係者が一堂に会して企画について語る場を作るなど、こうした関係性構築、循環がより促進されるようになったと考えられる。特に本事業の興味深い点としては、人材がプログラム提供側、研究側、施設側、の間を越えたかけ橋として機能していることが挙げられる。例えばコーディネーターの役割を担う木村氏はえいめいで勤務しながら、群馬大学での研究の経験がある。評価を実施する際には「関係者間での対話」が重要とされるが、本事業では文化庁、大学、プログラム企画側（アート関係者）、施設側、調査評価チームの関係者が集まった議論を密に行うことができた。広いステークホルダー間での対話の実現している、理想的なケースと言える。今後もステークホルダーの関係性構築を大切にしながら、社会的インパクト評価を進めていくことが重要である。

### ・ 調査事業として次年度以降実施すべきこと

今後本事業をさらに社会包摂のために加速していき、地域での認知度を向上していくためには、成果の可視化をし、実際にヒアリングだけではなく、どのような価値が生み出されているのかを追う必要がある。加えて、前橋市の文化事業、福祉事業として位置付けることも期待されていることが明らかになったが、まだ前橋市の担当部署との連携等には至らなかった。今後はより広い関係者からの声を抽出していき、成果を明らかにしていくためにもさらなる調査が必要だと考えられる。

アーツ前橋の「表現の森」は今回とりあげたえいめいで「音の玉手箱」以外にも、複数の社会包摂活動を展開している。本企画を含めて全 5 企画から構成されている。その目的は、現状の価値観に限定され、生きることの困難さを抱えている人々にそれぞれ個人の考えの表現を通して、他者と共有することを目指している<sup>6</sup>。来年度以降は、前橋で継続されているこうした企画に、今回の知見を展開し、具体的な企画に関してさらに伴走して調査評価等を行うことが重要だろう。個別の企画や事業が取り組む課題は様々だが、社会におけるアートや美術館が果たしうる役割や、課題を明らかにするために、それぞれの担当

---

<sup>6</sup> 「音の玉手箱」の他には、「滝沢達史×アリスの広場（不登校、ひきこもりの若者のフリースペース）」、「中島佑太×南橋団地」、「廣瀬智央・後藤朋美×のぞみの家（母子生活支援施設）」「Port B ×あかつきの村（旧難民定住センター）」の4つのプロジェクトがある。



者が意見交換する場を設け、個別の課題を共有し、より良い活動展開を目指すことが期待される。

- ・ **本調査事業の出口戦略**

少子高齢化社会が進み、孤独などの社会課題が複雑化、増大している。大学と文化施設が協働し、福祉の現場と新しい関係性を結び、社会包摂機能を持つ文化芸術事業を推進し、その価値を明らかにしていくことが必要である。特に一定の成功をしている事業・企画の意義・関係者の感じる価値を言語化・可視化し、モデル化できる部分を抽出していくことは、今後の文化芸術による社会包摂活動を推進、より広く展開していくためには重要であろう。成果を可視化していくことは、より多くの関係者に価値を伝えることにつながり、最終的には国全体の文化政策として文化庁、国民に還元していくことが望まれる。

文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業

芸術文化による社会包摂型度の評価手法・ガイドラインの構築とアート実践による  
検証研究

委託元：文化庁 地域文化創生本部事務局

住所 〒605-8505 京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町4-3-3

発行：ケイスリー株式会社

住所 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷三丁目2-6番16号 第五叶ビル5階